

府中かんきょう 市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報
2013年 春号 4月10日発行/季刊
発行人：竹内 章
連絡先：府中市分梅町 1-20-3
TEL 042-364-3428

崖線保全と『協働推進』 で高野市長に陳情

昨年12月3日に、「西府崖線保全活動」の一環として、高野市長に『府中市西府崖線・湧水周辺の環境保全と協働推進に関する陳情書』を提出するとともに、本件に関して12月19日に趣旨説明のため市長との面談を行いました。

「府中崖線の保全」に関しては、当会として過去10数回、要望書や陳情を行っており、関係部門に課題提起をしておりますが、具体的な進展がないまま今日に至っている施策もあります。市長交代を機に再度陳情を試みました。

崖線の保全に向けた東京都の動き

府中崖線の「斜面緑地」の重要性については、府中市の「緑の諸計画(環境基本計画、緑の基本計画など)」にも景観を含め大切に保全して行くべき「緑地」として謳われています。

このような中で、平成22年、東京都と区市町村が策定した「緑確保の総合的な方針」に基づき、東京都は平成24年3月に「崖線の緑を保全するためのガイドライン」を発表し、各関係自治体の取り組みが注目されています。

陳情書の概要

陳情書の主な内容は、府中崖線保全に関する市の「緑の諸計画」に明記されている施策の具体化や、西府町湧水の枯渇対策、斜面樹林帯の拡充整備、さらに各自自治体



熱心に説明する会員



高野市長に陳情書を手交する竹内理事長

にも策定が求められている「生物多様性の保全に向けた基本戦略」を早急に策定すると共に、崖線の生態系の調査についても至急開始すべきである等、11項目に及んでいます。

特に、市の緑行政の窓口が多岐に及んでおり、市民目線からすると職掌や分担が分かりにくく、一本化が必要である等、かなり具体的な問題点についても、提言いたしました。また、市が推進する具体策について、我々市民団体としても積極的に協力して行く意思表示を含め、「市民との協働」をより一層推進して欲しい旨要望致しました。

市長の反応と意見

これに対し、市長は時折メモを取ったり、資料に眼を通したりと、熱心に耳を傾けていただきました。特に、行政組織については、行政側の都合で部署ごとの職務権限を決めたり、組織の名称についてもあまり市民目線が考慮されていない状況であると認識している。組織の見直しについては、25年度は既に計画が終わっており、改善には結び付けられないが、26年度には、見直しを含め考慮したい旨、発言がありました。

「市民と行政との協働」については、“25年度の組織の見直しの中で、「市民協働推進本部」を設置する予定であり、本部を中心に協働がより具体的に進むよう推進していきたい”との心強い意思が示されました。さらに、新年の職員向けメッセージや「広報ふちゅう」にも「市民との協働」を重視する旨、掲載することになっているとの事でした。

今回の市長との面談は、全体として我々の主張については一定の理解を示されたように思えると共に、方向性としてもかなり一致していると認識できました。今後の推移を注意深く見守って行きたいと思っております。

(理事長 竹内 章)

『市民との協働』を考える

「NPO法人府中かんきょう市民の会」の活動目的と活動エリアは、主として府中市です。府中の市民団体として、行政に働きかけ、環境問題を手がけてきましたが、常に課題となるのは、行政との連携や協働です。市が提唱している「市民との協働」について例会で話し合ってみました。

前向き市長で一気に道筋を



高野市長は「市民との協働を柱とした、まちづくりを推進するために、より多くの市民との会話を重ね、ご意見をいただき、バランスの取れた行政運営に努めたい」。「地域住民が自らの判断と責任において、地域の諸課題に主体的に取り組むことができる、市民との協働のまちづくりを推進する」など、市民との協働について強い信念を持って取り組む姿勢を示しています。（『広報』平成24年4月1日「市政運営にあたって」より）

また、『広報』平成25年1月1日「新春を迎えて」でも、「家族や地域の人と人をつなぐ“絆”の大切さが改めて注目される中で、防災をはじめ福祉、子育て、環境、安全対策など様々な分野において、市民一人ひとりが地域や行政と連携し、相互に支えあう“協働”の必要性は、これまでも増して高まっている」との認識を持って、現在策定中の第6次府中市総合計画の中でも、「市民と共に目指すこのまちの将来像を“協働”により実現するための道筋を示して行きたい」と述べています。

市の職員も、市長の熱い思いを持った「市民との協働」を実現するために、事業全体を見直して、市民との協働で進める具体的な事業を抽出し、実現に向けてスタートされることを期待したいと思います。（理事長 竹内章）

市職員のことなかれ主義の打破を



府中市では残念ながら市民も市も「協働」でことにあたる土壤が育っていなかったように感じています。

私の市民活動の中では数は少なかったが、市の職員にも職務としてでなくボランティア活動に参加して一緒に楽

しくやったこともありましたが、全体としては近隣他市に比べてまだまだだと思っています。市も市民と一緒に素敵な「ふるさと府中」を創る気持ちがあると思います。

それを市民に理解してもらうために時には街へ出て、例えばボランティア活動に参加してみませんか？

市と市民の「協働」がうまくいくためには少し時間がかかりそうです。せっかく市長が力をいれているので、前例踏襲とかではなく、お役所仕事をはなれて市民と一緒に汗を流しませんか？

市長の掛声だけでなく市が本気で「協働」に取り組んでいくことが市民に伝われば、市民はたぶん十分に協力すると考えられますが、どうでしょう。（横山永望）

府中市職員も「市民の会」に参加を



NPO法人府中かんきょう市民の会は、平成11年に「より良い府中の環境の確保」を目的に結成し、今年は13年目を迎えました。環境関係の各種行事や調査、また提言や陳情などを行ってきました。振り返りますと、いろいろと改善すべき点も浮かび上がってきています。

私は一昨年12月から昨年6月まで、府中市第6次総合計画市民検討協議会に参加しましたが、強く感じた点は、今後、府中市の施策遂行にあたり大事なことは、「市民と行政の協働」を如何に充実するかにあると思います。

協議会は5つの部会で、私は「生活・環境部会」に属し、委員は13名で、うち4名は府中市の若手職員でした。こうした組織構成は初めてのことだそうですが、フェイス・ツウ・フェイスで活発で建設的な討議が出来ました。

しかし、これまでの総合計画に目を通してみますと「市民と行政との協働」が環境分野のみならず随所に記載されていますが、画餅に近く実態とは大きな乖離があります。

「市民との協働」の実を上げるには、常日頃から官民のコミュニケーションが必要であり、協働の熟成のためには、市職員が市民の会や民間組織に積極的に参加することを市当局が奨励し、市民目線と行政目線の相互の深化により、行政施策の円滑な進展を期待します。（大崎清見）

行政の“たらい回し”の克服を



「市民との協働」に関して私の脳裏をよぎったのは、千葉県松戸市の「すぐやる課」のことである。当時、松戸市長だった松本清が1969年(昭和44年)に市長直属の部署として設置した。従来の地方行政では、緊急性のある事態に対して何重もの決裁が必要とされ、すぐには対応できなかった。「組織の縦割り」という、旧来の陋習を打破しようとの試みであろう。ちなみに松本清は、大手ドラッグストア「マツモトキヨシ」の創業者でもある。

国、自治体、民間企業をとわず組織が一定の大きさになると、縦割りの弊害が出てくるのは当然である。民間企業がそのことによって経営が行き詰まっても…雇用の問題はあがるが…市民とは直接関係ない。

しかし、自治体はそうはゆかない。自治体の業務内容の分担は自治体当局が決めるものであるが、縦割りの弊害によって市民に不便を強いることがある。俗にいう、たらい回しである。

府中市の「緑行政」は環境安全部、都市整備部等に分散している。この2部署の役割には相反するものがある。当会においてもよく話題になる。市民との協働の観点からすると由々しい問題であろう。今後、「協働」の場において、整合性に欠けていることを粘り強く訴えていく必要がある。

(葛西利武)

「市長への手紙」も制度疲労



前市長時代に始まった「市長への手紙」。

市民が、直接、市長に対して気軽に行政にまつわる苦情や要望を伝えることができるのと、市長も市民が何を考え、行政に何を訴えようとしているかが判り、良い制度だと思う。

しかし、この制度により「市長への手紙」を出した経験から云えることは、制度は立派でも、市長から届いた「お返事」にガッカリさせられることも多い。

「お返事」が市行政施策の内容や具体策の説明にとどまり市民に対し「ご理解」を求めているに過ぎないからだ。

台風で倒れた市道の街路樹跡への若木の補充を求めたのだが、市は交通の障害になるからと素早く、倒木を撤去。倒木跡をアスファルトでふさいでしまっただけだった。

市民側としては、市の建前である「緑の保全」から後退しているこの処理に、それは違うだろうと異議を唱えたいのだ。「市民との協働」を云うのなら、こうした市の制度疲労にもメスを入れてほしい。(館浩道)

“たらい回し”から歩み始めた「協働」



ボランティア活動では縦割り行政の狭間に出会うケースが多々ある。行政内部が専門化されていて「本件は〇〇課が担当しております…あちらになります」と案内される。公園についても遊具、ごみ、樹木、草花と分かれる。

市民は公園で起きている事象は、全て「公園」というくくりで「要望」や「苦情」をだすことになるのだが…。

職員はご努力されているが制度が不十分なため「たらい回し」になり「主管部門でない」という淋しい表現に出会うと市民は“たらい回し”にされているという感を免れない。行政と市民が協働できる組織・制度改革が特に望まれる。

道路についても、都道だ！ 市道(私道)だ！で始まる。

その一例として、予算との関係だろうが、街路樹等の枯木・放置が目立つ、市民が除去して身近な草花を植樹できないのか。

東京都には制度として「東京ふれあいロード・プログラム…みんなで育てる東京の道…住民のみなさんのボランティアによる快適な道路環境作りを目指して、プログラムを導入しました。参加してみませんか」で始まる冊子が準備され地域の小学校児童の活動が紹介されている。府中市にはこのような地域との協働作業がなぜ展開されないのか？

この冊子を参考に、新町地域の一部では住民と小学校児童が一緒になって、“枯れ木の街路樹帯空間に植栽”を試行し、“市民花壇づくり”では、協働作業により年代を超えてのコミュニケーションの場が少しずつではあるが広がり地域の活性化にも役立ちつつある。

さらに協働作業が地域市民の活性化に役立った例として四谷下堰緑地があげられる。この緑地は多摩川からの用水路跡が三屋通りで分断され、多摩川側は平成17年まで不法ごみの山だった。緑道は多摩川“かぜのみち”までは開通しておらず手前で封鎖。緑地の自生植物ヒガンバナとの語呂合わせで“ごみより似合うヒガンバナ”のキャッチフレーズで清掃活動呼びかけ、行政は緑道を三屋通り～かぜのみちまで開通、緑道両側にヒガンバナを植栽。本会ではごみ跡に自然保護・植栽を行った結果、今日では、市内一のヒガンバナ名所に変わりつつある。

また、平成20年の台風で緑地内の7本のハリエンジュが倒れたが、行政は倒木を「倒木危険樹木」に指定し伐採を計画したが進まず、平成22年9月の15号台風で更に22本が倒木。民家も被害にあった。行政は倒木処理・抜根と整地。地域自治会と本会では跡地に、クヌギ、コナラ、キツネノカミソリなど自生植物の苗木移植・植栽を行った。市民憲章にふさわしい環境(まち)づくりとして、またこの協働作業の成果が世代間交流の場として10年～30年後へと引き継がれることを願っている。(田上昌宣)

第13回 レンゲまつり

4月27日(土) 10時から14時まで
押立町1丁目38番地の田んぼにて



花飾り
あそび



※雨天とその後の
足元のコンディション
が悪い時は順延
になります。

- ・花飾りあそび
- ・シャボン玉あそび
- ・草笛づくり
- ・エプロンシアター
- ・蜂蜜販売
- ・市内レンゲ田情報
- ・「農ある風景」写真展示
- ・藁細工あそび
- ・コマ作りあそび
- ・紙芝居
- ・クイズ
- ・府中産野菜の販売
- ・田んぼの草花紹介

主催:NPO法人 府中かんきょう市民の会 / 後援:府中市

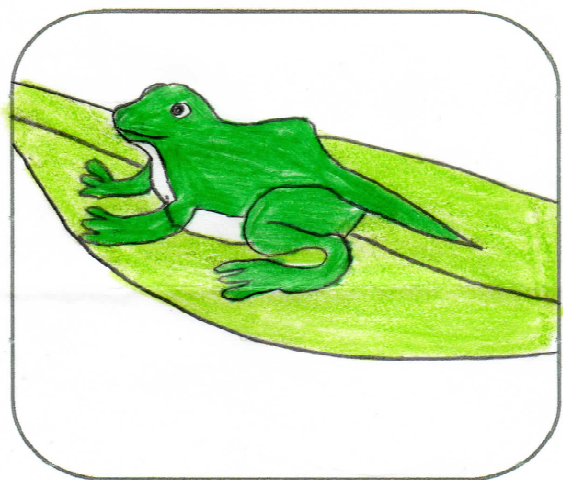
第8回田んぼの学校

当会主催の田んぼの学校は8年目です。その1年前に武蔵府中田ロータリークラブの50周年記念イベントと共催したことを数えると9年目になります。当初は学校でイネ栽培を習う高学年(小学校4~6年)を対象にイメージしてプログラムを準備しましたが、応募者が低学年化し、幼稚園児まで応募する状況が続いています。当初、スタッフは教えることに力点を置いてきました。このように事態を考慮し、参加によって、何かを感じたり、気づくことがポイントであると考へ、体験を手助けすることに軌道修正しました。

田植えて泥が「ねっちょり」、「ムニョムニョした土が気持ちよかった」など実感がこもった感想文がきます。稲刈りでは最初おそるおそるの鎌を、コツがわかると見違えるようにスピードがあがり、短時間の体験でも効果は抜群です。

親子体験を大いに活用しよう！

学校の特徴として、父母が同伴しますから親子での体験もできますが、なかには親の方が夢中になる風景も見られます。開校日は5回ですが、バケツ稲は田植えから稲刈りまで、自宅で、親子で稲を育てることができます。水やり、草丈や茎のふえ方(分げつ)を観察しながら、育てることのむずかしさ、面白さが体験できます。そこに親子の対話も生まれます。それに自分たちが植えた田んぼ稲との比較もできます。さらに田んぼには様々な生き物がいて、それらに触れて楽しむこともできます。



ぼくは、はじめてしっぽがあるカエルを見てよかったです。ほかにもいろいろな虫を見てよかったです。小学三年生の絵日記より)

田んぼの学校2013 年間スケジュール

- 5月26日(日) 第1回 開校式・田植え・バケツ稲
- 7月 6日(土) 第2回 稲の生育観察・草とり・生き物探し
- 9月28日(土) 第3回 モミ観察・イネ刈り・ハサかけ
- 10月12日(土) 第4回 脱穀・モミすり
- 11月17日(日) 第5回 収穫祭・修了式

〈募集要項〉

- *募集数 40名(こえるときは抽選) *参加費 800円
- *対象 小学生~大人(小学3年以下は保護者同伴)
- *場所 農工大学本町農場(雨天実施)
- *時間 9:00~12:00
- *交通 自転車OK、車の送迎のみ可

自分で作れた！ 太陽光パネル

2月16日に行なわれた環境まちづくりNPO「エコメッセ」主催の「太陽光パネル」作りに参加しました。

50Wのミニ太陽光発電システムを3時間ほどで作るワークショップです。教えてくださるのは「藤野電気」の小田嶋さんです。電気とか配線とか、まったく不案内の私ですが、太陽光発電には興味があったので、「できるのかな？」と思いながら半信半疑で挑戦しました。



最初は、いろいろな部品の説明です。

「ソーラーパネル」は縦76センチ、横54センチ、厚さ35ミリ、重さ5.5キロの単結晶シリコンで最大出力は50Wです。

「チャージコントローラー」はバッテリーへの過充電を防止し、適切な状態に保ちます。

「シガーソケット」は携帯の充電に利用できます。

「バッテリー」は12V。満タンにすると14V弱。

「インバーター」はソーラーパネルやバッテリーの直流を交流に変換します。

さて、これからが組立作業です。

①「ソーラーパネル」と「チャージコントローラー」をケーブルで繋ぎます。

ケーブルの被覆をはがし、芯線をそれぞれのコネクタの棒端子に圧着します。長い端子をソーラーパネルのオスコネクタに、短い端子をメスコネクタに。そしてもう一方は丸型端子に圧着します。丸型端子はチャージコントローラーにねじで止めます。このケーブルの被覆をはがすのが結構難しく、見学で参加した方にやっていただきました。ねじ止めは何とか私でもできました。

②チャージコントローラーとバッテリーを繋ぎます。絶縁電線の被覆をはがし、丸型端子を絶縁キャップをはめて両端に圧着します。チャージコントローラーにねじ止めします。

③チャージコントローラーとシガーソケットは、シガーソケットのオス部を切り離し、そこへ丸型端子を圧着します。チャージコントローラーにねじ止めします。

④バッテリーとインバーター
インバーターに付属している鱗口クリップを切断して、丸型端子を絶縁キャップをはめて圧着します。バッテリーとインバーターを繋ぐ時は、インバーターのスイッチはオフにしておきます。ソーラーパネルのコネクタも、はずしておきます。

バッテリーにインバーターとチャージコントローラーをつなぎ、インバーターのスイッチをオンにすれば、そのコンセントに家電をつないで使用できます。

ワークショップの数日後に、家で説明書を見ながら全部の部品を繋いでみました。ソーラーパネルを太陽のほうに向けて、恐る恐るインバーターのスイッチをオン。うまく発電しているようで、カセットテープで音楽を聞くことができました。「自前の電気を使っている」…というなんともいえない満足感があります。

ミニ太陽光発電システムで使えるで電気量は50Wのノートパソコンは4～6時間、40Wの液晶テレビは5～8時間、20Wの蛍光灯は10～15時間だそうです。我が家では、どう活用していこうかと目下思案中です。(梅沢みどり)

勝谷寛子写真集
長春を歩く

問合先 勝谷寛子
TEL・FAX: 042-363-9050

ISBN978-4-931078-24-6 C0072
判型 225×200mm 132ページ
カラー120ページ モノクロ12ページ
定価 2310円(本体2200円+税)
発行日 2012年12月8日

発行
JRP 出版局

戦時中、《満州》に暮らした
小学生の私の目にうつったのは、
長春の緑豊かな並木道、
美しい公園、
三重窓の煉瓦造りの家。
五十年ぶりの「長春再訪」の記録。

私は一九三六年東京品川で生まれ、二歳のときに、父の仕事の関係で満州に移り住みました。黒龍江省のチチハルで小学校入学。二年生の時に新京に移り住みました。現在の吉林省の首都長春です。…終戦ではないけれどお父やお母を暮らしたを楽しんでいました。…終戦で生活のすべてが一変、日本の民間人たちは無一物で放り出されました。一年後、日本に引き揚げるまでの苦労は筆舌に尽くしがたいものがあります。…書きはじめたよ。

水辺の楽校発表会 を訪ねて

私は「足腰」のために毎日多摩川かぜのみち周辺をウォーキングしています。

その日も初夏の多摩川を横目で楽しみながらセッセッセと歩いていました。すると大丸堰辺りに青い幟旗がたくさん風にはためいているのが見えました。

近づいて見ると白抜きで「水辺の楽校」とありました。河原に沢山の子どもたちの姿があり「何をしているのかな」と立ち止まって見ていると、子どもたちが土手の斜面を駆け上がってきて草の中をガサガサと何かを探し始めました。まるでバッタの子どものようでした。

「何をしているの」と尋ねると、「バッタを捕まえるの」。「いいな、仲間に入れてほしいな」と思いました。実は子どもの頃バッタやトンボ等を素手で捕まえるのが得意で「名人」と呼ばれたこともあったのです。雨降り後の広場にできた水たまりにアメンボウを見つけ、近くに池はありましたが繋がってはいません。「どうやって池から来たのだろう。」不思議で不思議で長い時間アメンボウをみていました。

2～3日して思いだして広場に行ってみると水たまりもアメンボウも消えていました。アメンボウはどこに行ってしまったのか不思議で不思議でたまりませんでした。庭に穴が沢山あって、蟬の幼虫が出てきたものだと思いましたが蟬がどうやって土の中へ入ってたまごを生むのかと勝手に思っていました。これも不思議で不思議で何日も庭にごさをひいて蟬を見張っていましたが、いつもごさの上で眠ってしまい解りませんでした。幼稚園児の頃です。かなり後になって両方も解明したのですが、この頃の体験がいまの私、虫好きおばさんに繋がっているように思います。

最近脚の腿の上でトンボを眠らせることもできるようになりました。2月11日の広報ふちゅうに「府中水辺の楽校・活動発表会・展示会」の文字を見つけ、勇んで郷土の森博物館へ向かいました。会場内は13名の実行委員(市内の小学生3年生～6年生)が力を合わせて作成した、大型絵本・ジオラマ・手書きの魚の絵・川遊びに欠かせないライフジャケットの装着方法・ライフジャケットを着て川に流された時の「河童の河流れ」と呼ばれている水に身を任せる方法、おぼれている人がいたときの救助方法なども楽しく実演付きで発表していました。川遊びに欠かせない大切な注意点を楽しく学び、模擬体験しながら身につけて行くことはとても貴重な学びになっていると思いました。

**府中水辺の楽校
活動発表会**

平成25年2月17日(日) 午前10時～
会場: 府中市立郷土の森博物館本館 会議室

※入場料は市内の小・中学生は「学びバスポート」ご利用で無料となります。
大人(市民)の方は100円にてご入場できます。

内容

- 子ども実行委員による活動発表
- 小学校の「総合的な学習の時間」の活動発表
(支援校: 天徳小・武蔵台小・新町小・四谷小・日新小・明星小)
- 水辺の楽校体験コーナー など

新しい発見
多摩川の植物たち
たくさんの人のご協力
多摩川の生きもの探し

水辺の楽校のスタッフの方々には府中市の小学校の「総合的な学習の時間」の支援活動もされているそうで、それぞれの小学校の学習発表も堂々としてとても立派なものでした。子どもたちはこのような経験・体験を通して大きな自信を身につけて行くのでしょうか。子ども実行委員の発表のなかに多摩川で取れた魚やキクイモの調理法を工夫・研究して美味しく食べたともありました。私は感激しました。楽校はすばらしい！子どもにこのような力を発揮させることができるのかと。子どもたちは水辺の楽校で楽しく学んだことで将来人生の選択肢が沢山増える事でしょう。

皆さんは野草や魚がやけどをすることをご存知ですか？実は野草や魚は人間の手で触れると人間の体温で火傷をしてしまうそうです。野草や魚の体に火傷のようなあとが残っている事があるそうです。野草や魚を触るときは水で手を冷やしてから触るようにしてくださいね。発表会で学びました。

発表会の最後に子ども実行委員に紹介された「子ども実行委員の長老さん」のお話です。「子どもの頃の体験が仕事をリタイヤしてからの俗に言われる”老後“の自分を支えてくれるといわれます。子ども時代は色々多くの事にチャレンジして、その体験を自身の中に蓄えておきましょう。水辺の楽校で得た体験も将来必ず皆さんの”力“になると信じています」と結ばれていました。あの日のアメンボウと蟬、イナゴやトンボとりの「名人」と呼ばれた時代が現在の私を支えているのかもしれない。水辺の楽校活動発表会で得た私の大きな学びです。(伊藤順理子)

多摩川野鳥観察会報告

日時 2013年2月3日(日) 晴 8:30~12:00 大澤、影山、安ヶ平
 場所 郷土の森博物館正門前~郷土の森公園修景池~多摩川大丸堰(左岸)~ニセアカシア疎林付近
 参加者 30名(子ども8名) 市民の会会員6名 会員外協力者2名 市職員2名

好天に恵まれて参加者の出足がよく、双眼鏡が不足するのではないかと心配するほどでした。郷土の森公園に入るとすぐに芝生広場にハクセキレイ、ツグミ、シメ、ムクドリなどを観察、修景池ではマガモ、カルガモが観察できました。

大丸堰は鳥が少ないので上流に向かって進みました。カイツブリ、モズが見られ、さらに進むとカワセミが確認され、参加者全員が何回も見ることができました。戻る途中で中洲の茂みを見ると、ホオジロ、カシラダカ、ベニマシコと次々に小鳥が見られました。陽気がよく鳥たちとの出会いもあり参加者が満足してくれた様子でした。

参加された子供たちからの感想文がありますので、当日の様子がわかると思います。

一観察できた鳥一

カイツブリ、カワウ、ダイサギ、アオサギ、マガモ、トビ、カルガモ、イソシギ、キジバト、カワセミ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ツグミ、シジュウカラ、カシラダカ、ホオジロ、カワラヒワ、ベニマシコ、シメ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、外来種ドバト
 25種+1種

(大沢邦男)



カワセミ

わたしは、このかんさつで、よくきき、よく見れば、みじかに鳥がたくさんいるということがわかりました。ラッキーなことに「カワセミ」が見れたのでしあわせでした。すごくいろいろなことが学べてよかったです。

わたしが一番いんしょうにのこったのは、「カワセミ」です。なぜあんなに小さいのに大きなさかなをくわえられるのか、がびっくりしました。こんども楽しみにしています！！

小柳小学校4年 出口七緒

子供たちの感想文と絵

一原文のまま一

2月3日の「多摩川野鳥観察会」はとても楽しかったです。なん種類もの野鳥を、自分の目で見にいったのははじめてです。

全部かわいかったですが、その中でも一番かわいかったのはカワセミでした。きれいな色のカワセミはとてもかわいかったです。

小学校5年 町田ひかる

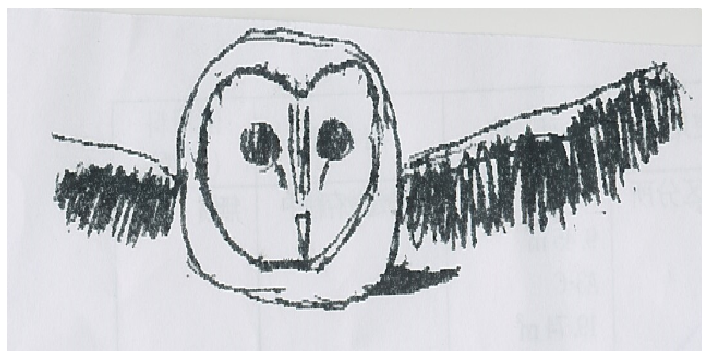


カワセミが長い時間見られてうれしかったです。いろいろな鳥が見られて楽しかったです。ぼくはカイツブリが小さくてかわいかったと思いました。

南町小学校5年 内藤遼将

いろんなとりやふじさんが見れた。たのしかった。

小学校2年 梅川結衣



原発依存について 考える

小平市民の力で太陽光発電点灯

「小平で市民ソーラー発電所をつくろう！」が、2月23日(土)13:30~16:45に開催された。会場は小平市中央公民館2Fホール。主催はNPO法人・こだいらソーラー、後援は小平市、参加者約100人。

第1部は、「足元から地球温暖化を考える市民ネットエドがわ」、「太陽光発電所ネットワーク」、「多摩市循環型エネルギー協議会」の3団体の代表者によるパネルディスカッション。

最初に「こだいらソーラー」の都甲(トウ)公子代表から、2月18日に太陽光共同発電所第1号が作動、19日には東京都よりNPO法人の認証を受けた旨の報告があり、参加者から大きな拍手をうけた。

場所は市の民間企業のビル屋上を無料で借り、出力12kw(200W×60枚)で、発電量は一般家庭3世帯分の年間12,000kwh程度。設置費の500万円は、都の補助金120万円を除いた分を市民有志から借りました。

行動のきっかけは、一昨年(2011年)の東日本大震災である。原発依存からの脱却と再生可能エネルギーの普及を目指している。

強い主観は客観を呼ぶ

第2部の基調講演「エネルギーシフトで、未来の当り前を今、現実のものに」の一端を述べる。講師の田中 優(ゆう)さんは1957年生まれ。未来バンク事業組合理事長、天然住宅バンク理事長、立教大学大学院、和光大学大学院、横浜市立大学の非常勤講師。

以下は田中さんの講演と著作物からの論に、私の考えも加味して進める。まず、国民は原発をゼロにするか否かを問われているが、この問いにはもう一つの選択肢が示されていない。そうしなければ、「原発を否定するなら電気を使うな!」「あなたは非現実的で無責任だ!」などの愚かしい意見に惑わされる。

○「電気が必要」のロジック

沢山の電気が必要→それには大規模な発電所が必要→数多くの巨大発電所と揚水発電所のような蓄電施設が必要→すると地球温暖化や資源争いによる戦争、原子力の危険性も避けられず→しかしながら、原発は必要悪

○「電気が必要」のもう一つのロジック

電気が直接必要(手段)ではなく、必要なのは明るさ・温かさ・便利さである→それならほかにも方法があるはず→まず各人が省エネしてから、少量の電気なら自然エネルギー



都甲公子代表のご挨拶

一でも可能(自然エネルギーに強い高性能バッテリーは開発済み)→太陽光発電+小さなバッテリーをそれぞれの装置につける→需要が下がれば大規模な電気の供給は不要となる→不要になれば必要悪の「必要」がとれて原発は「悪」だけとなる。

ドイツでの再生可能エネルギーの割合は68%である。日本の2.7%とは雲泥の差である。日本はドイツを見習う必要がある。さらにドイツが進んでいるのは、この30年間で電気消費量を1.17倍にとどめているのに、日本は1.66倍に増えている。ここからわかることは、自然エネルギーの割合を高めるためには自然エネルギーの施設を増やす前に、電気消費量を増やさないと肝要だ。

かつて宇宙飛行士が、宇宙からみた日本はひとときわ明ると述べた。いまにして思えば、明るいことは決して褒められることではない。各家庭では日本は世界一の省エネ生活をしているといわれるが、全体で見た場合まだまだ浪費をしているということだろう。

繁華街の不夜城のネオン。24時間開店のコンビニ。夜間になるとほとんど人気のない道に、煌々と輝く自動販売機。さらに、ホテル・旅館等から出る大量の残飯、スーパー等での期限切れの食品の廃棄等々、贅の限りを尽くしている。こんなことが未来永劫続くはずがない。古来、我が国にあった「もったいない」、「足るを知る」は死語となりつつあるのだろう。

最後に、講師の田中さんのデーターに基づいた論理的で強い主張には感銘を受けた。自らも岡山県に移住し、オフ・グリッド(独立型電源システム)の生活をしている。チェルノブイリ原発事故以来、環境活動に関わり、現在は反原発の「語り部」となって日本全国を巡っているようだ。

(葛西利武)